



LIFE

2022

実践レポート集



社会福祉法人 太樹会



社会福祉法人 太樹会 第12回 実践報告

中期経営計画2027

2022年4月～2027年3月の5ヵ年計画

4

専門性と支援の質の追求

Page	Title	Department
非掲載	お互いが無理せずできる移乗方法とは	二上ユニット
非掲載	生活者に対する支援員による運動支援	三輪ユニット
非掲載	健康は食事から ～食べることから喜びへ～	吉野ユニット
5	共に喜び生活者の自己実現が増える	高円ユニット
非掲載	新卒支援員の自己覚知	飛鳥ユニット
非掲載	生活の質を良くして、こころの健康を維持するために ～アンケート結果から現状を把握する～	龍田ユニット
4	レッドゾーン勤務で感じた本音とは	葛城ユニット
7	一人ひとりの「美味しい」を探した取りくみ	白虎ユニット
非掲載	食事支援が難しい生活者へのアプローチ	玄武ユニット
非掲載	「ごめんなさい」を言われたい排せつ支援	朱雀ユニット
非掲載	本人・家族が望む「看取り支援」を考える	青龍ユニット
非掲載	在宅生活を継続できるデイサービスの役割 ～IADLに着目した機能訓練を取り入れて～	デイサービス
6	言葉かけがもたらす減薬効果	医務
8	非常時における居宅介護支援の検討	ケアプランセンター
非掲載	機能訓練機器の効果を検証	ケアマネ・相談
非掲載	水分摂取量の少ないユニットへのアプローチ	栄養
非掲載	福利厚生に対する意識調査と現状把握	総務
非掲載	満足度向上のためにできること	飛龍ユニット
非掲載	スライディングボードの活用	天羽ユニット
非掲載	口腔ケアの取り組み	大和ユニット
非掲載	和里（にこり）香芝における腰痛調査	万葉ユニット
非掲載	シナプソロジー®導入における効果測定	デイサービス
非掲載	健康応援金 使用用途および意識調査	事務・医務
非掲載	経費削減＝サービス向上	耳成ユニット
非掲載	浮腫を軽減するために	香具ユニット
非掲載	生活者の想いを考え、関わっていくために	畝傍ユニット
非掲載	ヨーグルトで記憶力アップ ～メモリービフィズス®記憶対策ヨーグルトの活用～	事務・医務
9	和里（にこり）®に入社しての1年 / 岡本 玲奈	飛鳥ユニット

シナプソロジーは、株式会社ルネサンスの登録商標です。
メモリービフィズスは、森永乳業株式会社の登録商標です。
和里（にこり）は、社会福祉法人 太樹会の登録商標です。

社会福祉法人 太樹会 第12回 実践報告
評価結果



Rank	Department	Title	Page
1	和里（にこり） 葛城ユニット	レッドゾーン勤務で感じた本音とは	4
2	和里（にこり） 高円ユニット	共に喜び生活者の自己実現が増える	5
3	和里（にこり） 看護	言葉かけがもたらす減薬効果	6
4	和里（にこり） 白虎ユニット	一人一人の『美味しい』を探した取りくみ	7
5	和里（にこり） ケアプランセンター	非常時における居宅介護支援の検討	8

惜しくも入賞にならなかった皆さま，報告ありがとうございました。



和里（にこり）

ニ上ユニット / 三輪ユニット / 吉野ユニット / 飛鳥ユニット
龍田ユニット / 朱雀ユニット / 青龍ユニット / 玄武ユニット
デイサービスセンター和里（にこり） / ケアマネ・相談 / 栄養 / 総務



和里（にこり）香芝

大和ユニット / 万葉ユニット / 天羽ユニット / 飛龍ユニット
デイサービスセンター和里（にこり）香芝 / 事務・医務



和里（にこり）香芝II

耳成ユニット / 畝傍ユニット / 香具ユニット / 事務・医務

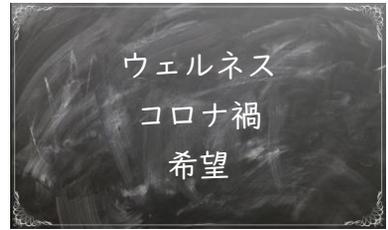


共に喜び生活者の自己実現が増える

私たち

部署： 高円ユニット
 施設名： 和里（にこり）
 報告者： 澤口 三輪子

こだわり



取り組みのねらい

施設で暮らしても豊かな人生を自己実現できる。
 今、何ができるか考える。

生活者は、感染症対策により、個室対応を余儀なくされたことで、体力・気力の低下がみられた。

平常に戻り、ユニットで今、何ができるか考えた際、ウェルネスという言葉に出合った。琉球大学の荒川氏は「身体の健康、精神の健康、環境の健康、社会的健康を基盤にして豊かな人生をデザインしていく、自己実現（2017年）」を提唱されている。

生活者にしたいことを質問形式で聞き取りを行った。支援員は生活者の笑顔を写真に収め、介護の魅力、仕事のやりがいを実感する。実行のプロセスや成功体験が得られたときに、共に喜び、生活者の自己実現が増えることをねらいとした。



取り組みの成果

自分のしたいこと、できることを実現するためには、
 喜びを共感できるマンパワーが必要

楽しみが実現できた

- ・ 囲碁をする
- ・ たこ焼きを焼く
- ・ ネギトロ丼を食べた
- ★カラオケ
- ★洗濯物干し、たたむ
- ★生け花をする
- ★背筋を伸ばして歩く
- ★植木、花の世話
- ★広報誌、雑誌を読む

注) ★ 継続できていること

マンパワーの必要性

様々な事情で、支援員が減り、穏やかに過ごしていた生活者が、ユニットから出ていかれる回数が増えるなど、落ち着きがなくなった。

支援員が少なくとも、自立支援に繋がる言葉かけ、仕組みづくりを考える努力が大事である。

生活者のアセスメントを行い、本人が大切にしている価値を把握し、自立支援から自己実現を目指すためにも、必要な関わりができるマンパワーが望まれる。

今後も生活者、ご家族、多職種の協力も受け、共に支え合いながら、生活者のウェルネスを実現、喜びを共感したい。

言葉かけがもたらす減薬効果

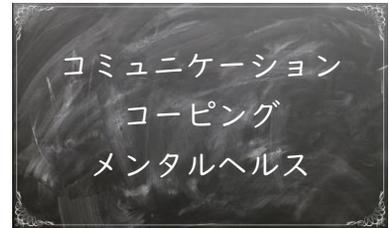
私たち

こだわり

部署： 看護

施設名： 和里（にこり）

報告者： 川人 明美



取り組みのねらい

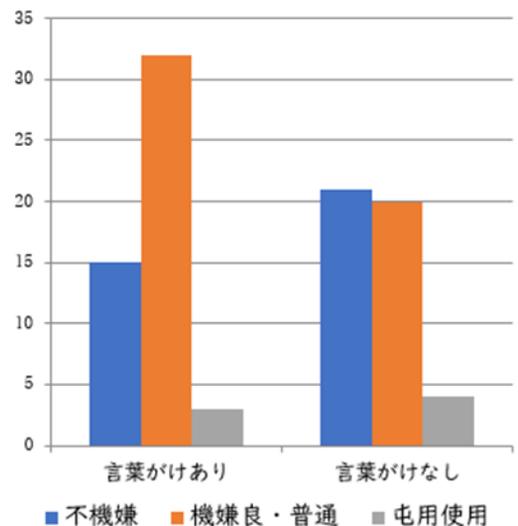
その薬は必要？

社員のかかわりで減薬に繋がらない？

精神薬は主作用・副作用があり，興奮を鎮める目的もあるが，転倒や誤嚥，昼夜逆転など，運動機能へのリスクが潜んでいる。

また，血液中で吸収され，身体の各所で薬の効果をj得るが，肝臓や腎臓など内臓機能への負担も大きい。

怒りっぽく手に負えないからと内服に頼るのではなく，日中に顔なじみの社員が散歩や日光浴を勧めるなど，気分転換を促す言葉かけをおこない，生活者が感じている何らかのストレスを軽減させることができれば，内服を減らせるのではないかと考えた。



取り組みの成果

両者のメンタルヘルスにも影響，薬以上の効果があるとわかった。

結果は，言葉かけをおこなうことで気分のムラや屯用の使用頻度が減少，12月後半には，眠剤の服用時間にはすでに入眠しており，服用しない日もあった。

言葉かけによる気分転換で，焦燥感が軽減し，精神薬の減量に繋がった。

また，かかわる時間が少ない非常勤の社員に対しても，気分転換の言葉かけをおこなうことで，生活者との関係性が向上し，苦手意識が軽減したことから，互いに周囲と良好な人間関係を構築できたという結果も得られた。

日々，生活者一人ひとりに対して十分なかわりを持ってているかといえば，満足に対応できていない現状がある。

今回，言葉かけが減薬に繋がることに加え，言葉かけをする側も関係性が向上した現状から，生活者・社員の両者に薬以上の相互作用が確認できた。今後，この取り組みを他の生活者へ活かしていきたいと考える。

一人ひとりの「美味しい」を探した取りくみ

私たち

こだわり

部署： 白虎ユニット

施設名： 和里（にこり）

報告者： 樋野 眞弥子



取り組みのねらい

食べたいと思える気持ち、喜びを持ち続けていただけるように

食は命である。即ち、命は人生である。

食事は、栄養摂取だけでなく、その人の思い出として記憶に残っているものである。だが、施設に入ると提供するものは皆同じ味付けで食が進まないことも多い。ある書籍では「食事はおいしくなければ栄養にならない」ともいわれている。

私たちはこの考えに基づいた支援が日々提供できているか改めて考えた。

一人ひとりが「おいしいと感じる食事」の提供とは何か。また、今後、家族・本人・ユニットの関係性を築く1つのきっかけになる取りくみにしたい。



取り組みの成果

一人ひとりの美味しい食事の提供とは味付けだけではない、
相手を知りどんなひと手間を加えるか

(1) 誰にとっても「食」は記憶を思い出すツール

当たり前のようにできたものを配って、食べてもらうことがメインになっていた。特に味付けだけを意識していたが、食事には作る、盛り付け、具材を選んで食べる、があり、すべての工程においても一人ひとり思い出があることに気付いた。

一緒に作りながら「うちでは紅ショウガ入れててん」など作る工程で昔を思い出す場面もあった。すべての工程を通して、相手を知りきっかけにもなり、色々な提供方法を考えることも大切なひと手間になると感じた。

(2) おいしそうに食べる姿の安心感

コロナ禍で訪問制限があり「ご飯食べていますか？」など、ご家族の声が多く聞こえた。夕食づくりを通して、食べておられる写真をお渡しすると「自分で食べてるね。ありがとうございます。」と安心されている様子だった。言葉だけでなく写真を添えることで、会えない時間でもご家族に安心していただけるのではないかと感じた。

今後も継続してさらに視野を広げ、ご家族と協力し、使用していた調理器具や取り寄せするほどお好きだった調味料なども生活の一部に取り入れられることも目標にしていきたい。

非常時における居宅介護支援の検討

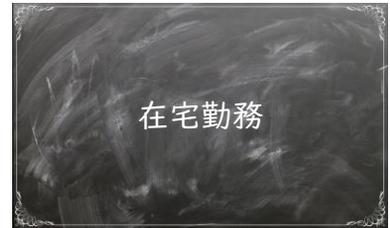
私たち

こだわり

部署： ケアプランセンター

施設名： 和里（にこり）

報告者： 小倉 麻理



取り組みのねらい

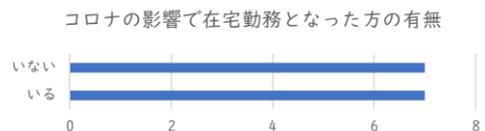
他事業所へのアンケート調査を通して、コロナ禍を含めた非常時における居宅介護支援の在り方を考える

近年人材確保や生産性向上を目的とした働き方改革の推進や、新型コロナウイルス感染症の影響により、多様で柔軟な働き方に転換している。

その中でもICT(情報通信技術)を活用した時間や場所に縛られない働き方として「テレワーク」の導入が進んでいる。

今回、ケアプランセンターで社員が新型コロナウイルスに感染したことをきっかけに、感染拡大防止策として事業所として取り組んでいることなどについて、自由記述を含めた7項目のアンケートを近隣市町14カ所居宅支援事業所に実施した。

調査結果を踏まえて、ケアプランセンターの居宅介護支援の在り方について検討する。



取り組みの成果

① 短時間訪問・担当者会議の簡略化で対応している事業所が多かった。

② 在宅勤務時は、機器類支給の事業所が多かった。

【考察】

在宅勤務時、スマートフォンなどの支給で対応している事業所が多く、日頃からファイルなどを作成してケアマネ全員で情報共有している。

コロナの影響で急なサービス中止により、サービス調整が難しく、代替サービスの導入によるケアプラン見直しなどの業務量の増加がある。また入院中に面会ができず、状態が分からないままサービス調整が難しいケースがあった。

高齢者世帯や支援者が陽性者になると、本人の生活が成り立たなくなるケースがあり、介護保険外のサービス把握と繋ぐことが重要である。

【まとめ】

今後、非常時にはケアプランセンターにおいて、機器類の支給やケアマネ同士の連携が不可欠である。

また、同時に在宅勤務ができる事業所内の体制づくりが必要であるが、いくつか課題がある。

- 各家庭のインターネット環境の整備(費用負担を含む)
- 情報漏洩による個人情報の流出を防ぐ
- 勤務状況の把握

和里（にこり）

飛鳥ユニット 岡本 玲奈

和里（にこり）[®]に入社しての1年



和里（にこり）を選んだ理由，福祉に携わることにした理由

私は、大好きな祖母に少しでも健康で長生きして欲しい，そのために私が食で支えたいと思い管理栄養士を目指し，大学で栄養について学んでいました．そんな中，福祉学科と関わる機会があり，初任者研修という資格があることを知り，いつか役に立つかもしれないと思い受講しました．

管理栄養士として病院に勤めたかったのですが，新卒募集がなく諦め，高齢者施設へ実習に行ったこともあったため，そこに就職しようと思い就職活動を始めました．和里（にこり）を見つけ，栄養士兼支援職という働き方ができることを知り，魅力を感じ，入社を決めました．

入社したときに感じた思い

ユニットに配属され，生活者の顔と名前，居室，食事形態や個人食器などを覚えることから始まりまし
た．大学では栄養について学んできましたが，介護の知識は全くなく移乗や排せつ支援など一から指導していただく必要がありました．また，認知症とともに生きる人とも関わったことがなく，認知症について理解を深める必要がありました．栄養士兼支援職といっても，食事支援くらいで栄養職務が基本だと思っていた私は，生活者を不安な気持ちにさせず支援していけるのか不安でした．

3か月を過ぎて感じた思い

多職種カンファレンスに栄養士として参加しました．多職種が集まり情報を共有することで，様々な視点から問題点，解決策，課題提案を行い，共通理解を深め，より広い視点で支援が行われているということを知ることができました．日頃からユニットで支援を行っているため，生活者の食事量や食事に対する意欲，変化をその場で感じる事ができ，すぐに対応することができる点が栄養士兼支援職の強みだと感じました．

6か月が過ぎて感じた思い

初めて生活者を看取り，損失感を感じると同時に，すべての方が段々と食事が食べれなくなり，老衰し，看取りの過程を経て亡くなるわけではなく，最期の瞬間に直面せず突然のお別れもあることを体験しました．看取り支援になってから好きな食べ物を用意するのではなく，普段からその人の嗜好を尊重することの重要性を感じました．また，その人の人生の最期を看取れる状況にいる職業は特別なことで，この仕事を少し誇りに思いました．

9か月が過ぎて感じた思い

食欲や嚥下状態などの食事の様子観察を他のユニットへミールラウンドに行くようになりました．食事の姿勢や嚥下状態を実際に見ることができ，いつまでも健康で長生きするためには食事と栄養面からのアプローチが欠かせず，自分の口から食べる喜びサポートし，健康を支えることができるのが栄養士の魅力だと改めて感じる事ができました．また，食べるものひとつで生活者の方々の助けになる実感を得られるのは，唯一高齢者施設で働く栄養士だけが感じられるやりがいだと思います．

2年目を迎えるこれからの

臨床分野に興味を持っており，各病態の展開食を考えたり，栄養サポートチーム（NST）の一員として専門性の高い医療現場で働きたいという気持ちは変わりませんが，栄養士と，介護士の2つの視点から生活者をサポートすることができるのは自分の強みであるため，生活者との関わりを大切にしていきたいです．また，寝て起きて大体毎日決まったように過ごし，一日が終わるコロナ禍で外出も訪問も制限される中で，月一回，旬の野菜や果物を使用し，生活者が食べる楽しみを持つことができるようユニット料理に力を入れていきたいと考えています．そして，病院業界でも介護業界においても管理栄養士の地位が低く，まだまだ食事の大切さへの理解が薄いのが現状です．毎年6月は「食育月間」，毎月19日は「食育の日」と言われているため，和里（にこり）でも地域の食材を使用したり，郷土料理を提供するなど何か取り組みへの働きかけができたらと思います．

